

『和訓栞』 原本の復元 (二)

—見出し項目について—

前回に引き続き『和訓栞』原本の復元を試みる。

なお使用の清逸本（河北景楨本を谷川士清曾孫にあたる谷川清逸が書き改めたもの。天保十年の識語を有す。四十冊。石水博物館現蔵）については、その内的徴証として挙げた

(1) 先ず清逸本と景楨本との関係であるが、前者「にしのかり」項に不明の文字であることを示す符号として二個の四角（□）が用いられている（「吉野先主」の「先主」に当てたもの）。これを景楨本の虫損とみるならば、清逸本はその忠実な写しということになる。清逸本をもって景楨本と見做すことは十分可能である。但し、清逸本に追記がまったく見られないわけではない。

(2) 『和訓栞』には士清見聞の記事が年号を冠して記載されているが、清逸本においては「ねずみ」項の「安永丙甲（五

年）の夏」までが確認できる。これは整版本の場合と同じである。ちなみに北岡四良氏は「かかる見聞記録を『栞』に収めたのは士清だけの仕事で、後人の加筆でないことが判る」（『和訓栞成立私考』）として居られる。

(3) 右に關し、「はぎ」項は「安永丙甲（五年）の春」を記すが、清逸本には整版本から除かれた記事、傍線部を見ることがができる。

下野国足柄郡和泉村八幡山より村正真秀氏か伐取しはりの木の内に大神宮の三字見ゆめり 安永丙申の春内官車館に来る 正しく天造の物なりし 奇瑞目を驚しぬ 予か参宮の前日に来るといふ 小野の榛原に皇祖天神を祀る事神武紀に見ゆ（下略）

士清が自称の語として「予」を使用することは、例えば

三澤 薫 生

いか ……○烏賊をいふハ形もいかめしく骨もことやう

なれハ名つくる成べし(中略)又予か族家に井中

より五嶋いかの子を出す 其地海に遠し [前編]

るど ……○予か近隣の一卒婦を迎へて後赤そぶ水の井

いつとなく浄水となれり(後略) [前編]

などからも拾い出せる。

景楨本が安永五年春以降節略刊行される安永六年九月ま
でに写されたことが判明するが、これをもって前項(2)と併
せ考えるならば、景楨本の書写年時は更に絞られることに
なる。

よって整版本刊行時に近いころの稿本と断じたが、これにつ
いては更に左の一点を追加しておく。

(4) 谷川士清自筆『和訓栞』(七冊。石水博物館現蔵)は『栞』

稿本の中でも成立の早い稿本である(拙稿「谷川士清自筆『和
訓栞』について」『和洋国文研究』四十一号)が、その自筆稿

本に本項掲出の項目、すなわち節略なき項目が認められる。

左はその一例を示したものである。清逸本が整版本刊行以
前に位置することが裏付けられる。

うけたまはる

自筆本 承をよめり 古語にうけたうハリと見えたり

又うけばると物語に見えたるも同し 承諾の義也

清逸本 承をよめり 給はるをそへていふハ承て心得

るの意也 古語にうけたうバリともいへり 又うけ

ばると物語に見えたるも同し 承諾の義也 庭訓の

一本に事奉をよめり

きちん

自筆本 黄色をいふ 麴塵の音なるへしといへり

清逸本 黄色をいふは麴塵の音なるへしと云り ○旅

宿にいふハ木賃と書り たきゞの賃也 又夜具の著

賃のミを出してやとるをいふ也

じたらく

自筆本 自墮落の意也 世事使用にハ邇邇字を用たり

清逸本 自墮落の意也といへり 世事使用に邇邇を訳

せり 広韻に邇邇不謹事也と見えたり

とびバす

自筆本 蓮実の飛をいふ 俗にとつびやすといへり

又ハすのミのやうなともいふ也

清逸本 蓮実の飛をいふ 俗に放免の人をとつびやす

といひ蓮の実のやうなといふ也

【古の部】——二十二例

① こあげ

水脚をいふ 和漢ともに船より出たる辞成へし 大坂に中仕と呼り

—「物類称呼」「負ふと云事」の条に「……又浅草御蔵前にて。小揚といふ物ハ大坂にて。中仕と云にひとし」(卷5・8オ)とある。

② こいつ

此奴の義 彼奴をあいつといふに對へたる辞也 這廝を諷す 俗語也 ○あいらこいらといふも同義也

—「助辞訳通」「這」の条に「這字コレト読ム 俗語ニ限ル 俗語ニ此ヲ這ト云ヒ。彼ヲ那ト云フ。罵リ詞ニ這廝ハ。コイツ也。那廝ハ。アイツ也(下略)」(中巻・6ウ)とある。「這廝」の「廝」は「廝」を誤るか。『大漢和辞典』は「這廝」とあり「水滸伝」を引く。

なお「助辞訳通」(上中下巻三冊。岡白駒著。無刊記。宝曆十二年の序を有す)は『文語解』(五巻五冊。釈大典編。明和九年刊)とともに「和訓栞」典拠の一つ(「助辞鶴 下」(勉誠社文庫74)の國金海二氏「解説」)。例えば「和訓栞」「あらかじめ」項の「日本紀に豫字をよめり……まへかたからと訳す 豫ハ素定也と註せり 預も同し 逆をもよむ 先事預度之也と注す 宿をよむハ夙と通ず 早也とみえたり」(前編)は、『助辞訳通』の「豫」に「豫字預ト同シ。アラカジメト読ム 先事早謀也ト注シ。マヘカタヨリ備へ用意ス

ルヲ豫ト云フ(下略)、「逆」に「逆字モ。アラカジメト読ム。逆モ

先事預度之也ト注スレドモ意較別アリ 逆字ハ本迎也ト訓ズ 事ノ来ルニ臨テ迎へ度ルコトナリ 預ハ平素ヲ以テ云フ故ニ中庸ニ事豫 則立ヲ素定也ト注ス、「宿」に「宿字モ。アラカジメト読ム

③ こうか

俗にかハヤの事をかく呼り 挨囊抄に後架と見えたり

—例えば「黒本本節用集」・「饅頭屋本節用集」に「後架(コウカ)」「小便所」(「放尿 処也」)「内割注。以下同様」・「増補下学集」に「後架(コウカ)

「放尿 処也」(「非増補部。家屋門・第七」とある。なお「和訓栞」には「搗囊抄(鈔)」「挨囊抄(鈔)」の両形が認められるが、書名としては前者を良とする。

④ こうす

参遠の方言に伊勢にてたと、云意にいへり 又東国にてこといふ所あり

⑤ こうせき

俗に言語をかくいふハ口迹の音也といへり

⑥ こくらん

黒蘭の義 南部あり 伊勢あり 花黒し

⑦ ごかう(第二音節「こ」に有)

赤子初生の時用うる薬を五香と云は仏生会に五香水をもて仏

像を浴する事あるによれり 歳時記に四月八日諸寺以五香水浴仏と見えたり

―「塩尻拾遺」巻九に「○今世赤子初生の時の用薬を惣て五香といふ。局方の五香散は小児に用る事はあれども、初生の時用ゆべきともなし。是は仏生会に五香水を以て仏像を浴する事ある故、其の名を仮て五香といふとぞ。

唐)歳時記四月八日諸寺以五香水浴仏と白眉故事にいふ。注に五香者本州謂青木香為二五香木。四月八日為浴仏朝云々。(下略)〔「日本隨筆大成」〕とある。ちなみに五香とは沈香・梅檀香・

丁子香・鬱金香・龍腦香の五種を言う。

⑧ こころばみ

源氏にミゆ 心あるをいふ よしばみといふかことし

―「源氏物語」末摘花に「此はや、昨日の返事。奇しく心はみ過ぐさるる」とて投げ給へり。女房達「何事ならん」とゆかしがる。〔「元和古活字本。日本古典全集一・一四一頁」〕とある。なお古活字本の使用に関しては後掲「しはぶき」項を参照されたい。

⑨ こじくわ

午時花ハ俗称 本名ハ午時紅也 午時に開き子時に落 よて又子花ともいふ 落て凋ます 又下に向ふ事なし

―「大和本草」「夜落金錢」〔左訓ゴジクハ〕の条に「花鏡曰一名子午花 午間開花子時自落…○今案紅白二色アリ 紅ヲ金錢花ト云

一名午時紅 瓶史ニ見エタリ 倭俗午時花ト云…午時ニ開キ其夜半ヲツ 故又子午花ト云…花落テ後久シクシボマス アツメテ見ルニ堪タリ 又花ヲ散スニ皆仰ク 一モ俯カズ(下略)〔「卷7・13 オウウ」〕とある。

また「花彙」「川蜀葵」〔ヘセンシヨクキ〕の条に「ゴシクハ…ツネニ午時ニヒラキ子時ニ落ツ 地ニ落テ萎マズシテ錢ノ如シ 故ニ又夜落金錢 子午花 午時紅等ノ諸名アリ」〔「卷4・16ウ」〕、「和漢三才図会」「金錢花」〔「こじくハ」〕の条に「夜落金錢 子午花…俗呼曰午時花」(下略)〔「卷94之末・湿草類」〕とある。

これら資料に拠れば清逸本の「子花」は「子午花」の「午」の脱ということになる。

なお「花彙」(八卷八冊。島田充房・小野蘭山著。宝暦九年に草部二巻を刊行し、残りの草部二巻と木部四巻を宝暦十三年に刊行。明和二年・天保十四年の後印が有る)は「和訓栞」典拠の一つ。本稿においても後掲「さんざし」項「じらうほう」項等に引用が見られる。

⑩ こじつける

俗語也 牽強を訳せり

―「増補俚言集覽」「こじつけ」項に「無理に推てする牽強付会を云」〔「名著刊行会」〕が見える。

⑪ こしやうぶ

山木のちひさきもの也 神宮辺にいへり

⑫ こそぎ

新撰字鏡に櫛をよめり

— 享和三年本『新撰字鏡』「櫛」に「己曾木」(46才)とある。なお享和本の使用に関しては後掲「とねりこ」項を参照されたい。

⑬ ここのり

倭名鈔に兄鶴をよめり 小形の義 はしたかの雄也 ○にこのりハにハ丹の義 すくれて赤きをいふといへり すこのりハ巢より取て飼たてたる也 ○鷹にこのりがほといふハまろく細やかなるをいふとそ

— 『倭名鈔』「鶴」(ハシタカ)に「……野王按鶴(音遥 又去声 漢語抄云波之太賀 兄鶴古能里)似鷹而小者也」(寛文十一年付訓本。卷18・14才)、『大和本草』「鷹」の条に「……○鶴ハシタカトモ云コノリノ雌也……○兄鶴ヒハリヲトル 鶴ノ雄也(下略)」(卷15・13才)とある。

また『龍山公鷹百首注』に「にこのりとは一かとすくれてあかきを云也……丹兒鶴とかきてもにこのりとよむ也」(74番歌注)、『和歌宝樹』「スゴノリ」の条に「夏鷹ノ子ヲソタテケレトモ秋ツカフユヘニ秋ノ巢コノリト云 巢ヨリトリテカヒタテタル鷹也 コノリハハイ鷹ノ才鷹也」(岩瀬文庫蔵本)とある。なお後者「スゴノリ」の条は『歌林樸楸』にも認められる(但し「夏鷹ノ子」を「夏巢の子」とする)が、それは『歌林樸楸拾遺』の加わった『歌林樸也』(例え

⑭ このわた

ば静嘉堂文庫蔵本など、小高敏郎氏の言う第三・四系統本)である。海鼠の腸の義也 参州尾州を上品とす ○金海鼠ハ仙台の丑寅乃澳の島金華山の麓より出るをいふ

— 『本朝食鑑』「海鼠」の条「海鼠腸」(訓古乃和多)に「集解或称俵子……以尾州参州为上 武之本木次之(下略)」(卷9・37才)とあり、『和漢三才図会』「海鼠」の条に「熬海鼠……出於奥州金花山海辺者带金色 名金海鼠 為極上(下略)」(卷51・魚類)とある。

⑮ こぶだひ

俗に鯛の婿の源八といふ 石鱗魚也とも勒魚也ともいへり — 『広大和本草 別録』「稜鯛」の条に「和名コブタイ 俗ニタイノ婿ノ源八ト云 又石鱗魚トモ云 海志及東海異魚考ニ見ヘタリ」(下卷・27ウ)、『用業須知後編正誤』(上下二卷二冊。明和2年刊)「勒魚」の条に「鯛ムコノ源八 又グソクタイト云」(下卷・10オウ)とある。

⑯ こぼれさいはひ

僥倖をよめり — 例えば『塩尻拾遺』卷六十八に「○古へ我王政盛なりし時、……季世弥風俗をとろへ只々僥倖(右訓ぎやうかう・左訓こぼれさいはひ)の者多し。」(『日本随筆大成』)とあり、『書言字考節用集』にも「徹

倅(コボレサヒハヒ)〔割注略〕僥倖(同)〔言辭・九上〕とある。

「こぼれさいわい」は思いがけず訪れた幸いの意。

⑰ こんらう

軒廊ハ紫宸殿の西にあり 軒廊乃御トハ大嘗会に行はる、事也

― 軒廊は紫宸殿とその東側に続く宜陽殿をつなぐ廊。『江家次第』卷

三「踏歌」に「内弁起」座德音称唯、経宜陽殿壇上北行、出自軒

廊東」〔新訂増補故実叢書〕八一頁〕とある。清逸本の「紫宸殿の

西にあり」は誤記である。

また「軒廊乃御ト(みうら)」は『江家次第』卷十八「軒廊御ト」

に「万寿四年十一月三日按察使大納言行成被申行軒廊御ト、官人

等不候(下略)、「御即位以前行軒廊御ト」例〔新訂増補故実叢

書〕四七五頁〕などが見える。

⑱ こんべいと

金米糖と書とも もと蛮名也と云り 本草にいふ饒唐纒也と

もいへり

⑲ こもりそう

崩御の後泉涌寺の僧傍に候し誦経するをいへり

⑳ こやまがへり

三月より内に捕たる小鷹をいふ也といへり

― 『大諸礼集』卷十四「三議一統」の「第七 奏対門」に「一春鷹の

ことば 三月より内にたゞ取たる若たかをバ。野晒と云。…三月

よりうちに取たる小鷹をば小山復と申候也」(29オ)とある。

㉑ これたか

三代実録に貞観十四年四品彈正尹惟喬親王寝疾頓出家為紗

門 御年二十九也と見ゆ 此みこ惟仁の太子と御位争ひ給ふ

といふ流言あり 出家の後封戸を辞し給ふ表文三度ありしに

その勅答の様さる様ありしと八聞えす 又東寺の悉曇を深

く知給ひしよし物に見えたり

― 『日本三代実録』卷二十二「貞観十四年七月十一日」の条に「四品

彈正尹惟喬親王寝疾。頓出家為紗門。〔新訂増補国史大系〕と

ある。但し「御年二十九也」の一文は見えない。

なお右に關し、『勢語臆断』(岩波「契沖全集」)に以下の記事が見

える。一つは右「三代実録」を引いて「(三代実録)とあり。此時御

年二十九なり。…昔家文章に御出家の後封戸を辞したまふ表三通

あり。三代実録に勅書并に勅答二首あり。天然の友愛彼勅書に見え

たり。清和天皇は誕生の後七月に二歳にて東宮にた、せたまへり。

童話などのしるし国史に明らかなり。中宮の御腹にて外戚の御祖父

忠仁公なれはことわりにも過たり。然るを御位あらそひなといふ妄

誕の説にまどふ人おほし。委しく国史を見ずして吠声の談を信する

故也」(下之下・83)とある個所、今一つは「宗叡僧正に密教を学ひ

て東寺の悉曇を叡山の安然和尚に授たまへり。安然の悉曇蔵に見え

たり。」(下之下・82)である。『勢語臆断』は『和訓栞』典拠の一書。或いはこれに基づくか。

② これしきあれしき

西国にこれしこあれしこ 久留米に是しろ彼しろ 伊勢にこれほときあれほときといふ

—『物類称呼』に「○是ほど、いふ詞のかはりに西国にて。是しこ彼しこと云 伊勢にて。これほどきあれほどきと云 肥久留米にて。是しころあれしころと云 東国にて。是しきあれしきと云」(卷5・16オウ)とある。右に従うならば清逸本の「久留米に是しろ彼しろ」は誤記ということになる。

【佐の部】—十六例

① さいしやう

宰相ハ参議の異名位 署書にハ参議と称す 異朝の宰相とハ異れり ○北野に宰相殿と云ハ菅神の曾孫輔正也

② さいはひだけ

靈芝をいふ 福草の義 いはひたけ又万年たけともいへり
西土に万年芝の名あり 丹波にてハ門出草といふ 首途カトテを賀するに送之といへり 備中あたりにてハ首途を祝して盃とともにならべて出すといへり 一種かさなくて枝ある者あり 正字通にいふ鹿角芝也

—『怡顔齋菌品』(上下巻二冊。松岡玄達著。宝曆十一年刊)「靈芝」

の条に「達按 和名 福草 万年草 吉祥草 丹波ニテ門出草ト云 首途ヲ賀シテ送之之故ニ名ク 江戸ニテ猫杓子ト云 本邦処々山林多生ズ 人家ノ庭際ニモ生ス(下略)」(上巻「木草類」・5オ)とある。

③ さいしやうらう

採桑老ハ舞の名也 松田氏説に採桑三州樂曲 唐礼樂志に旧曲中に入り南宋樂也と見えたり ○あぢさゐに似たる木に名くるハ蓴葉花也と云り 花いかだともいふ

—『広和本草 別録』「蓴葉花」の条に「和名採桑老 アヂサイノ葉ニ似テ稍小 每葉中ニ花ヲ包ミ開クナリ 花腿ノ後子ヲ付ク 胡荽子ノ如シ 詳ニ本艸余録ニ見ヘタリ(下略)」(下巻・14オ)とある。

④ さけがら

拾遺集に見ゆ 鮭搦の義也といへり

—『拾遺和歌集』に「さけがらみ 輔相」として「あしぎぬはさけかわみてぞ人は着るひろや足らぬと思なるべし」(新大系本408番歌)とある。

⑤ さゝき

日本紀に雀をも鶴鷄をもよめり 皆小鳥也 俗に鶴鷄をミソさゝいといふ ミソハ溝なるへし さゝい小鳥ともよめり 壺囊抄に駄を訓するハあらず 下野にみそつぐと呼西国にみそつ鳥といひ仙台みそくゞりといふ 鴟ハ凡の鳥怖れをなす その中のみそさゝいハ怖れす 却て蜘蛛其外の虫を捕て鴟に

あたふといへり

垣根つたふさ、い小鳥よはや行て鶯さそへ春のまうけに
鶯の老ぬればさゝいになればさゝいハ鶯の親也といふ俗説あ
る也 ○靈異記に点をさ、きと訓するハいふかし ○和名鈔
に佐々木を篠筥と書り ○さ、き野ハ賀茂にあり 佐々木資
保住せし所也 花鳥余情に資雅卿ハ宇多源氏佐々木野といふ
蹴鞠の家也 後鳥羽院の時の鞠足也と見えたり 近江佐々木
莊司季定ハ秀義の父也 秀義子ハ定綱経高盛綱高綱義清也
ともに首として覇府の功を建たり ○さゝい葉ハ陽事を興す
淫薬也

―「物類称呼」「鶴鷓」の条に「ミそさゝいいさ古○奥州にて○ミそぬす
ミ仙台にて○ミそくゞり下野にて○ミそつぐと呼 西国にてハ○ミ
そつ鳥と云 或説に。此鳥溝の辺に三歳棲て長す。故にミぞさんざ
いと名付るをミそさゝいといふとぞ 今按に。ミそハ溝なり さゝ
いハいにしへさゝきといひし名の転したる也。さゝとハさ、やかな
る意 小き事也。三歳といへる義にハあらざるべし。又鷓と云鳥に
ハもろくのこ小鳥怖れて飛去る 鷓も鷹の属也といふ。それが中に
ミそさゝいハ曾て怖れず。却蜘蛛其外の虫を捕て鷓にあたふ。其時
悦ふ鉢にて食ふ 予正に是を見ル」(巻2・8ウ)とあり、「花鳥余
情」卷十九「若菜上」に「資雅卿は宇多源氏佐々木野といふ蹴鞠の
家也 有雅卿の子なり 有雅卿は後鳥羽院御時のまり足なり」(源

氏物語古註釈大成)とある。

また「本朝食鑑」「鶴鷓」の条に「**釈名** 駄(葦囊訓)佐佐伊
按 字書徒計切 音地 山海經鳥状如鳧 然則為鶴鷓之名者訛
焉)……**發明** 近世製ニ一方ニ号ニ鶴鷓葉ニ以興廢陽 日勤 房閨
外揚ニ求嗣之名ニ内 娼ニ探春之遊 不俟ニ求嗣ニ而速発ニ葦露之嘆
悼 哉縦使雖有瓦璋之慶 亦及ニ鄭衛之淫ニ乎噫 **付方** 陽事衰縮
〔世有ニ駄薬者ニ而家家秘之〕(巻5・33ウ、34オ)とある。

なお「鶴鷓」||「ささき」は、例えば「日本書紀」卷一「神代上」(宝
劍出現)に「以ニ鶴鷓羽為ニ衣 随潮水以浮到」(寛文九年本42オ。
大系本一三〇〜一三一頁)とあるが、「雀」の方は「古事記」下巻に
仁徳天皇を「大雀命(おほささきのみこと)」(大系本二六五頁)と
訓んだ例があるのみ。「古事記」の用例を誤ったか。

⑥ さしやなぎ

挿木の柳也といへり 万葉集に根張とつ、けり さす柳とも
よめり

―「万葉集」卷十三「挽歌」に「挂纏毛文 恐藤原…三雪零冬朝
者刺楊根張梓矣御手ニ所取賜而(下略)」(寛永本27ウ、28オ。大
系本3324番歌。書陵部蔵、谷川士清書入本。以下同様)とある
が、「さす柳ともよめり」の確例は明らかにしていない。

⑦ さねもり

蝗をいふ 実守の義成へし さるを斎藤実盛此虫に化すとい

ふハ西土にも蝗虫ハ戦士冤魂乃化する所也といふに似たり

孟蘭盆会の時分に出るをもて生霊虫ともいふ よて農家夜鐘鼓をならし松明をともして逐やるを虫送りと称す 本草にも性畏「金声」といひ夏虫の火に趣く もとより其所なるをもて多くの手火に集めて焚殺し念仏しとふらの俗あり 北夢瑣言にも不肖子第一変為「蝗虫」齧レ莊而食とも見えたり

―『大和本草』「蝗」(イナムシ)の条に「螟蟻蚤賊ノ四ヲスヘテ蝗ト云 イナゴノ類ナリ…本草綱目ニ蝗ヲノセス 蟲蠶ノ集解曰蝗亦 蠱類 大ニ而方首 首有「王字」 沴氣所レ生 蔽レ天而飛 性畏「金声」…○管子ニ凶年「五害 水旱風厲 虫ト云ヘリ 虫ハ即蝗ナリ 倭俗ニ実盛虫ト称スルアリ イナゴニ似テ小也 青色也 首ハカブトヲキタルカ如シ 稲葉ヲ食テ大ニ害ス 夜松明ヲトモシ鐘鼓ヲナラシテ逐レ之 コレ騰ナルヘシ 灯ト鐘鼓ノ音ニ畏ル(下略)」(卷14・11ウ・12オ)とある。

⑧ さぶし

光仁紀万葉集に見ゆ さびしに同し

―『続日本紀』卷三十一「光仁天皇(宝龜二年二月)に「歳時積往(往)蘇奈(蘇)佐(佐)夫(夫)之(之)岐(岐)事(事)之(之)弥(弥)可(可)益(益)加(加)」(新訂増補国史大系本)とある。なお明暦三年整版本は「佐夫之岐事」に「サヒシキコト」の訓みを刻す。

また『万葉集』の例としては、例えば巻四に「山羽爾味村騒去(ヤマトノハニエアマツラサキユキナレドワレハサフシエキミニシアラネハ)奈礼騰吾者左夫思患君二四不在者」(寛永本12ウ。大系本486番歌)、「

⑨ さふらん

卷十八に「桜花今曾盛等雖人云我佐夫之毛伎美止之不在者」(寛永本15ウ。大系本4074番歌)がある。

泊夫藍と書り らてゐん語也 本草綱目に番紅花といへるハ誤也 此邦の人参を用うる所に用うといへり 紅毛語ふうりすゑんたありす 又ころうくすをりゑんたありといふと見えたり

―『用藥須知』「紅花」の条に「ベニノ花ナリ…サフランド云モノアリ 本草綱目ノ番紅花是也 一名泊夫藍 一名撒夫即(下略)」(卷2・9ウ)とあるが、「物類品隨」「泊夫藍」の条に「ラテイン語サフラン 紅毛語フロウリスエンタアリス 又コロウクスヲリエンタアリト云 此物生草絶テナシ 乾花蛮国ヨリ来ル 東壁曰番紅花出ニ西番回地面及天方国」即彼地紅藍花也 按ズルニ此説大ナル誤ナリ 泊夫藍番国産ナルガ故李氏モ其何物タルコトヲ知ズ 花色紅ニシテ頗紅花ニ似タルヲ以テ妄ニ番紅花ヲ以テ命ズ(下略)」(卷3・草部)とある。―「李氏」とは『本草綱目』の著者李時珍(字は東璧)のこと。

また『紅毛談』「さふらん」の条に「紅花に似て色黒ミあり 諸血病もつはら用ひ他邦にて人参を用る病症に是を用ゆ」(下卷・17オ)とある。

なお『紅毛談』(おらんだばなし。上下卷二冊。後藤梨春著。明和

5年刊)は、後掲「せるでい」項に引くごとく、また

あみやんとす

和訓栞 火浣布をいふらていん語也 紅毛の古語にて今すてゐ

んふらす又あゝるとふらすといふ (下略) [中編]

紅毛談 らていん語なり 又一名あすすとすといふものあり

らていん語とハ紅毛の古語なり 今の詞にてハすていんふら

す又あゝるとふらすといふ 是ハ漢名火浣布といふ織物なり

(下略) [上巻・17オウウ]

へいしむれる

和訓栞 阿蘭より来る人魚の骨也といふ 偽多し 真を試るに

女人の髪をもて巻て火中に投し髪やけざるを妙とす [中編]

紅毛談 人魚の骨なり 長崎へ来る此もの偽多し 真を試るに

女人の髪をもつて巻き火中へ投じてやく 髪焼けざるを真と

す (下略) [下巻・13ウ、14オ]

などに見ることく「和訓栞」典拠の一書である。

⑩ ざふすい

雑炊なるへし 糝也 河内播州にびやうたれ加賀越中但馬

にみそづ越前ににませ伊勢にいれめしといふ ○牛に喫ハし

むるざぶづハ雑水なるへし

―「物類称呼」「雑炊」の条に「ざふすい○河内及播州辺にて○びやう

たれと云 加賀越中或但馬にて○みそづといふ 越前にて○にませ

と云 伊勢にて○いれめしと云 東国にて○ざふすい又○いれめしと

いふ……大坂及堺辺にてハ神棚に備たる雑煮あるハ飯のはつほ等を

集置て糝に調へ食す これを福わかしと云 こながきとハ俗にいふ

雑炊也。(下略)〔巻4・17ウ〕とある。

また『運歩色葉集』に「雑漿(ザウズ)飼牛之物」(静嘉堂文庫本。

元龜二年本は「サウツ」。また『温故知新書』は「雑水(サフツ)」

とあり、「増補俚言集覽」「雑漿」(ザ(フ)ズ)項は『運歩色葉集』

を引いて「愚按、今もサフズと云」(名著刊行会)と記す。

⑪ さへのかみ

倭名鈔に道祖を訓せり 行神也 津国にさへのもと、いふ所

あり 道祖本と書り 備中後月郡にさへちこといふ里あり

道祖児と書り 今さいのかみといひ幸神と書る是也 壺囊抄

に小社まるき石を置といへり 道神又ハ山神といふとハ別也

こハ手向の神ひきもの神道の長ちハの神ちまたの神くな

どの神等を祭るなるへし ○陸奥国名取郡笠嶋の道祖神ハ京

の出雲路の幸の神の娘なりといふ事古き物に見えたり 一説

に出雲路ハ本出雲路にて地名也 幸神ハ齋神にて式に所謂

出雲井於神社を謬り混したるなりともいへり ○常陸国高道

祖村の道祖の祭に大きな男根を木もて造り鳥居に掛といふ

―整版本「和訓栞」「さいのかみ」項(中編巻9・3オウウ)に右後

半部を載せる。清逸本が整版本に先行する稿本であることの一証で

ある。今清逸本・整版本両書の「さいのかみ」項を掲出し、整版本成立の過程の一端を示しておくことにする（整版本における棒線部は清逸本「さへのかみ」項、波線部は清逸本「さいのかみ」項）。

清逸本 幸神と書り 男女の顔を造るハ扶桑略記に見え烏帽子着たる頭に造るも著聞集に据侍る 男女を幸し婚を結ぶ神也といへり されと道祖の転なるへし 盛衰記に出雲寺の幸の神など見えたり ○上州あんなかの幸神の小石を美濃のおほるのあたりの幸神に奉りて祈願す ○信州松本の城下正月に市井の衢の中央に長さ十間余はかりの大柱を心とし松竹等をかさる 是をも幸神と称す 又御柱とよふ 少童多く集り柱の下をかこひ童輩の内一人を別当と名づけ水あびとて是を饗するさまありとそ三稜杖と辻祭の幸神と混せし風俗にやといへり 諏訪社三月中酉祭日にも御柱とて立る事あり

整版本 幸神と書り 男女を幸し婚を結ぶ神也といへり されと道祖の転なるへし 道祖を倭名鈔にしか訓せり 行神也 朝野群載に出京関間奉幣道神事と見え今さいの神といひ幸神と書る是也 盛衰抄に小社まるき石を置といへり ○陸奥国名取郡笠嶋の道祖神ハ京の出雲路の幸神の娘なりといへる事古き物に見えたり 一説に出雲路ハ本出雲寺にて地名也 幸神ハ斎神にて式に所謂出雲井於神社を謬り混したる也ともいへり ○常陸国高道祖村道祖の祭に大きな男根を木もて造り鳥居に掛と

【和訓栞】 原本の復元 (一) (三澤)

いふ ○上州あんなかの幸神の小石を美濃のおほるのあたりの幸神に奉りて祈願す ○信州松本の城下正月に市井の衢の中央に長さ十間余はかりの大柱を心とし松竹等をかさる 是をも幸神と称す 又御柱とよふ 少童多く集り柱の下をかこひ童輩の内一人を別当と名づけ水あびせて是を饗するさまありとそ三稜杖と辻祭の幸神と混せし風俗にやといへり 諏訪社三月中酉祭日にも御柱とて立る事あり

それにしても引用書例の選定に土清が慎重の上にも慎重を期していたことが判る（右で言えば扶桑略記・古今著聞集を排し朝野群載を採用）。『和訓栞』編纂に費やされた時間がいかほどのものであったかが想像できよう。

なお記すまでもないが、「さへのかみ」項における清逸本「出雲路ハ本出雲路にて」は整版本に見るとおり「出雲路ハ本出雲寺にて」の誤記。また『倭名鈔』の例は「道祖」〈サヘノカミ〉の注に「和名佐倍乃加美」〈寛文十一年付訓本。巻2・10ウ〉とある。

⑫ さまねし

万葉集にこゝろさまねしと見えたり さまねしとあるハ誤写にや

『万葉集』巻一に「浦佐夫流情佐麻彌之久堅乃天之四具礼能流相見者」〈寛永本30ウ。大系本82番歌〉とあるが、「佐麻彌之」の「彌」を土清は「禰乎」とし、「十七ノ卅八ノ十八ノ三十」〈大系本3995

番歌・4116番歌。書陵部蔵、谷川士清書入本)などの証例を挙げてゐる。

なお「誤写にや」とあるは、右寛永本を承けてのこととも取れるが、「さまねし」は数の多い意。「誤写」ではない。―上記以外にも士清は結句「流相見者」の訓みを「ナカラフミレハ」(「レア」に「レアノ反」と傍書し、「ミ」と「ハ」の間に片仮名「レ」を補筆)に改めている。

⑬ さんざし

山楂子と書り 処々に生す 花愛翫すへし ○羊杓子も稀にありて甚山楂子に似たり 一朵数十萼なる者也

―【花彙】「柿楂子」(シサシ)の条に「サンザシ 処処苑庭コレヲ植フ…春時新葉ノ間夕花ヲ開ク 五出白色花魁ニ異ナラズ 満樹堆雪ノ如ク愛玩スベシ…」(巻6・18ウ)、「羊杓子」(ヤウキウシ)の条に「人間稀ニアリ 扨挿ニ宜シカラズ ソノ樹高大ナリ 葉ハ青田葉ニ類シテ小ナリ 糖毬兒ニ似テ大ナリ…一朵数十萼毬ヲ枝梢ニナス 亦観ニ堪タリ 子モ亦糖毬状ニ異ナラズ タゞ熟シテ黄色 糖毬ノ紅熟スルニ異ナリ」(巻7・1ウ)とある。

⑭ さんじこ

山慈姑也 葉水仙の如く花赤し 花の時葉なし ○唐山慈姑といふハ夏水仙也

⑮ さゆり

百合をいふ さハ小の義也 さ、ゆり山ゆり同し 山ゆりハ古事記に見ゆ 秋咲もありといへり ○堀川院百首作者肥後を百合花と号すといへり 肖柏

あたに咲色もむつまじさゆり花大和言の葉おもふ名残に―【用藥須知】「百合」の条に「和名サユリ 一名山ユリ 一名サ、ユリ 此一品入藥用 此外種類甚多シ(下略)」(巻2・14ウ)とある。

また【古事記】中巻に「其の河を佐草河と謂ふ由は、其の河の辺に山由理草多に在りき。故、其の山由理草の名を取りて、佐草河と号けき。山由理草の本の名は佐草と云ひき。(以上注文)」(大系本一六五頁)とある。

⑯ さらたいし

さらた国乃産也 紅毛より来る玉の類也 さらたハ阿仙薬なとも出

【志の部】―十四例

① しきいた

倭名鈔に櫪をよめり 馬櫪と註せり

―【倭名鈔】「櫪」(シキイタ)に「唐韻云櫪(音歴 和名之岐以太)馬櫪也」(寛文十一年付訓本。巻15・2ウ)とある。

② し、むし

袋草紙にし、虫鳴時誦文の哥あり 蜥蜴をいふ 其色青白色也 毒ありといへり

―『袋草紙』上巻「誦文の歌」に「しし虫鳴く時の歌」として「しし虫はここにはななきししらははかしみにしづがとにゆきてなきをれ」

〈新大系本一六八頁〉とある。

③ し、のくひのき

倭名鈔に藜蘆を訓せり 鹿の杭乃木といふにや 一名やまうばらと見えたり 或説に藜蘆ハ今日光蘭 一名しゆる艸と称する者也といへり

―『倭名鈔』「藜蘆」〈右訓ヤマウハラ・左訓シ、ノクヒノキ〉に「本草云藜蘆〔上音藜 和名夜末字波良 一云之乃久比乃木〕」〈寛文十一年付訓本。巻20・19ウ〉とある。

また『物類品隲』「藜蘆」の条に「和名シユロソウ 又日光蘭ト云

○日光産上品 花紫黑色又白花ノモノアリ」〈巻3・草部〉、「花藜」

「藜蘆」(リロ)の条に「シユロサウ 日光蘭 (本文略)」〈巻2・3ウ〉とある。

④ したやく

下役の字 仕学大乘に見えたり

⑤ じだらく

自墮落の意也といへり 世事使用に邊邊を訳せり 広韻に邊邊不謹事也と見えたり

―『本朝俚諺』に「脱空 世事使用ニ見ヘタリ / 邊邊 同〔俗に云自墮落なり〕」〈巻9・23オ。追考下〉、「広韻」「邊」に「邊邊不謹事」

〈入声・二十八「盍」韻〉とある。なお『和訓栞』が『本朝俚諺』(十卷十二冊。井沢長秀著。正徳5年刊)を資料にしていることは、

例えば

いじく

和訓栞 狭衣に見えたる 下紐に世話にいふいじくは是也といへ

り(下略)

〔中編〕

本朝俚諺 狭衣云。そこらいじくとあり。同下紐云。いじくはと世話にいふがことし

〔巻1・18ウ・19オ〕

ねすまひ

和訓栞 鼠の穴より出んとして引こみく出かねてすまふ体をい

ふ 漢書に首鼠兩端といふにひとし 馬にもつけすまひといへ

りとそ

〔前編〕

本朝俚諺 これハ。鼠の穴より出んとしてハ。引こみく出かねることし〔馬のつけすまひに似たり〕漢書に。首鼠兩端といふにひとし。(下略)

〔巻3・21ウ〕

により立証できる。

本項が士清自筆本に認められる(前掲)ことからしても、本項前除の理由は不明とせざるを得ないが、同じく『本朝俚諺』を引く後掲「ちやうど」・「てんこちない」項については別に理由がないわけではない。

⑥ しなん

東京賦に「幸見_レ指南於吾子」と見えたり 指南車より出たり

―「東京賦」(張平子)は「文選」所収の一賦。「予習_レ非_レ而_レ遂_レ迷_レ也」。

幸見_ニ指南_ヲ於_ニ吾子_ニ。』(慶安五年本。卷3・53オ)とあるが、「諺草」

「指南」(右訓シナン・左訓シルベ)の条にも「古今註越裳氏来貢_ニ」

帰_ル忘_ル其_レ路_ヲ。周公与_ニ指南車_ヲ。至_ニ其_レ国_ニ。轄鉄銷_ス。指南車とは今世

の磁針_{ジシヤク}の類なり。こゝによりて万の教を受る事。指南車の方角を知

するが如しと云義也。東京賦幸見_ニ指南_ヲ於_ニ吾子_ニ。是人の指教を謝す

るに云詞也』(巻6・49ウ〜50オ)とある。

なお右のごとく『和訓栞』は「東京賦に」と見えたり」と「見え

たり」を記すが、「東京賦」の引用箇所、加点の差、「指南車」との

関係などからみて、本項依拠本を直ちに「文選」と断ずるは早計。

士清が「文選」を見ていたにせよ、本項直接の典拠は「諺草」と考

えるべきと思われる。

⑦ しぬび

万葉集に見ゆ しのぶ也

―「万葉集」巻二十に「阿我母_{アケモ}豆_{マメ}能_ノ和須例母_{ワスレモ}之_シ太波都_{ハツク}久波尼_{ハネ}乎_ハ布利佐_{フリス}

氣_ケ美_ミ都_ツ都_ツ伊_イ母_モ波_ハ之_シ奴_ヌ波_ハ豆_{マメ}』(寛永本26ウ〜27オ。大系本4367番歌)

とある。「しぬぶ」は偲ぶの意。但し万葉の時代「ぶ」は清音。士清

書入本には結句「豆」が「尼」に訂せられていて、「ツクハ山ヲ我ナ

リト思ヒ見テシノベ也」の一文が見える。

⑧ しハぶぎ

咳をいふ 頻吹の義なるへし 今ハせきといへり 声のせく

義也 新撰字鏡に嗽もよめり ○源氏に咳痛をしハぶぎやみ

とみえたり 鄙俗にしやぶぎといへり

―「物類称呼」に「○咳_{セキ}をせくと関東にていふを関西にてせきをせた

ぐるといふ…又東国にて咳ばらひ又しやぶぎするなといふハ嗽_{シハブギ}

のちゞミたる詞にて通称也』(巻5・14ウ)とあり、享和三年本『新

撰字鏡』「嗽」に「志波不支』(14オ・81オ)とある。↓「とねりこ」。

また『源氏物語』夕顔巻に「…此_{アツキ}暁_{アツキ}より、咳_{シハブギ}病_ヤにや侍らん、

頭_{カウラ}いと痛くて苦しく侍れば、いと無_ム礼_{レイ}にて聞ゆる事」など述給ふ。」

〈元和古活字本。日本古典全集一・七八頁〉とあり、「書言字考節用

集」にも源氏物語を引いて「咳病(シハブキヤミ)』(源氏)』(肢体・

五)とある。清逸本の「咳痛」は「咳病」の誤記とすべきであろう。

なお「咳病」の漢字表記は右古活字本以外には見当たらない(河

内本・青表紙本系はもとより、慶安三年刊のいわゆる「絵入源氏物

語」も同様)。士清使用の源氏物語として古活字本を想定することは

十分可能である。

⑨ しんもつどころ

所々より進献の物を納むる所にて月華門の外の南腋にありし

今ハなし ○進物所乃別当ハ拾介抄に以_ニ公卿近衛次将_ヲ為_ニ

別当_ト見ゆ

―「拾介抄」中卷宮城部第十九「進物所」の注文に「在_ニ月華門外南掖

外候、在兵衛陣、以公卿近衛次將為別當、以奉膳為預、有二年官熟食、進月奏、(新訂増補故実叢書)三九六頁とある。

⑩ しやくがミ

江次第元日宴会條に内弁於閑所令押_レ笏紙_一 註に「上自_三里第_一雖_レ可_レ押依_レ可_レ候_一小朝拜_一 今日不_レ押 仍此期押_レ之_一以_三次人_一中納言以上具_三笏紙_一参若不_レ具時 仰_レ外記_一令_レ押_レ之_一と見ゆ 又続日本紀に大納言源氏公上卿をして笏紙を押る、事見ゆ 上卿も内弁と意同し

—「江次第」卷一「元日宴会」の條に右引用文が認められるが、文末は「仰_レ外記_一令_レ押_レ之_一」に対し「仰_レ外記_一令_レ書_レ押_レ之_一」(新訂増補故実叢書)二二頁とあり、また「続日本紀」に「笏紙」は確認できない。

⑪ しやくハチ

律書楽図に尺八為短笛と見ゆ 軍中に尺八を腰にさす事ハ調子をしらんか為也と古き日記に見えたり 慈覚大師の尺八をもて引音の弥陀経を吹れし事見ゆ

—「倭名抄」「尺八」に「律書楽図云尺八_ヲ為_ス短笛_ト 縦_ニ向_ニ吹_テ者也_一」(寛文十一年付訓本。卷4・21ウ)とある。

⑫ しよむ

所務と書り 金銀糸帛諸色土産を今浮所務といふ

⑬ しやうのもち (第二音節「よ」に有)

勝の餅と書り 五條天神の社にいへり 天文九年の紀に見ゆ

⑭ じらうぼう

延胡索也といへり 勢州尾州などに産す 一種小葉の者ハ木舟鞍馬などにあり 葉けまん艸に似て花ハ淡紫色也

—「花彙」「延胡索」(エンコサク)の條に「ジラウボウ 勢州及ヒ尾濃州ニ産ス 毎歲寒露ノ後栽ユ 立春苗ヲ発ス 葉魚子牡丹ニ似テ小ニ月莖ヲ起シ花ヲ開ク 色淡紫 地鋪苗ニ類シテ美ク根半夏ノ如クニシテ色黄 一種小葉ノ者アリ 貴布祢鞍馬山中所在ニアリ 宿根ヨリ生ス」(卷2・10ウ)とある。

【須の部】—七例

① すあひ

職人哥合に見えたり 僧子をいふなり 或説に庭訓往来にいふ 疋給も是也といへり

—「職人哥合」は「七十一番職人歌合」のこと。四十一番に「すあひ。御ようやさふらふ。」(群書類従本。新大系本は「すあひ」に「牙僧」を当てる)とある。

なお「庭訓往来」「四月五日状 往信」に「弁舌博覧類 疋給 仲人等尤大切也(下略)」(新大系本三〇頁)とあり、旧注に「疋ハ少也。言ハ仲人ニシテ両方ヨリ贖取ル人也」(新大系本同書「付録」二六七番)とある。

② すいぜんじのり

肥後より出 水前寺と書り 川のりなりといふ

―「大和本草」「川苔」の条に「川苔モ海苔ニ似タリ 処々ニアリ(中略) 肥後水前寺苔ハ水前寺村ノ川ニ生ス 乾シテ厚キ紙ノ如ナルヲ切テ水ニ浸シ用ユ 此類諸州ニアリ」(巻8・30ウ〜31オ)とある。

③ すぎやうざ

修行者也 哥書にかく書たり

④ すげも

菅藻の義 海浜に生す 莎草の類也 藻塩草ハ是也といへり
―「増補俚言集覧」「すげも」項に「土佐の方言にてもしほぐさのことなり」(増補項目。名著刊行会)が見える。

⑤ すだら

俗語に理に向ふ事なきをすだらのあしいなといふハ梵語の修多羅也 翻して契徑といふ説 仁王經にハ翻して法本と見ゆといへり 韻瑞にハ仏氏以修多羅為經ともいへり 大安寺の大修多羅の供錢といふ事靈異記に見ゆ

―「東雅」首卷「総論」の注文に「今の俗にいふ所のごとき其一二をしるして例となす也 たとへば…理に合ふ事なきをスタラナシなどいふは修多羅也 翻して契徑といふとみえたり」とある。なお「契経」(かいきょう)は釈迦の説いた教えを述べた經典、梵語sūtraの漢訳(修多羅は音写)である。清逸本の「契徑」では文脈を満足しない。また「日本靈異記」中巻第二十八に「明日起きて見れば、門の椅

の所に、錢四貫有り。短籍を著けて、注して謂はく、大安寺の大修多羅供の錢といふ。女人恐りて、急に寺に送る。」(大系本二六一頁)とある。

⑥ すハウ

蘇芳の音転也 倭名鈔に見ゆ 蘇方国より出といへり 又蘇方の虫糞を紫納と見えたり

―「倭名鈔」「蘇枋」(スハウ)に「蘇敬本草注云蘇枋(音方 俗音須方)人用染色也」(寛文十一年本。巻14・14ウ)、「日本釈名」下巻「蘇芳」(スハウ)の条に「是そはうとよむ 音を転してすはうと訓ずる也 そとすと通す」(木17・15オ)とある。

⑦ すぼこ

すハすこのすに同し ぼこハ小児の奥詞也 すぼつこうともいへり

―「和訓栞」「すこ」項に「万葉集に菜つむ須兒とも山田もる酢兒とも見えたり 賤民をいへり 男女に通する名成へし(下略)」(前編・巻12・7オ)、「物類称呼」「小児」の条に「をちこ〇…奥羽にて。わらしといひ又ほこといふ(下略)」(巻1・7ウ)とある。

【世の部】―六例

① せをり

背折の義 衣なとた、むにいへり まさすけに見えたり
―「まさすけ」は「満佐須計(雅亮)装束抄」を指すか。第一巻「も

やひさしのてうどたつる事」に「かみのこしに御ぞにうはぎうちぎぬ
こうちぎ一つをかさねて。れいのきぬた、むやうにせおりにして右
をうへにてうちかくべし。」〔群書類従本〕とある。

② せず

不為の義也

③ せつかひ

刷の匙也 僧家の飯に箸刷匙の三物を用う その内の刷子也

―右解説文はすでに谷川士清の『鋸屑譚』(おがくずばなし)に「和
名抄に、七の字かひと訓ず。今俗飯七をおたひかひとす。…飯七、
伊勢物語にはゆるいひかひなり。狭七又云。鶯十種香器鶯と名づ
くるものあり。その形似たり。ゆゑに名づく。あるひはいふ、刷の
匙也。仏飯に箸刷匙の三をもちふ。その内の刷子なり。」〔日本隨筆
大成〕とあり、また『和訓栞』「かひ」項にも「…○匙をよめる
ハ飯匙の類也 貝の形に似たる也(下略)〔前編。卷6下・10ウ〕
とあって、本項との重複は認められない。士清自筆本に清逸本と同
一内容の項目(刷の匙也 僧家の飯に箸刷匙の三物を用 その内の
刷子也)が存する点からみても、本項削除の理由は明らかでない。

④ せよ

俗語に令三人為二之の意にいへり

⑤ せらす

俗語也 らす反る せるに同し

⑥ せるでりい

阿蘭陀より来る芹の類也

―『紅毛談』「せるでりい」の条に「せりの類なり 此外おらんだな
おらんだちさ等あり」〔下巻・20才〕とある。↓「さふらん」。

【曾の部】―二例

① そうさう

送葬の音也

② そでぐり

装束略抄に狩衣の袖括ハ十五未満 毛抜形と見えたり

【多の部】―二例

① たづねもとむ

討求の義也 仏足石の哥にもよめり

―日本古典文学大系『古代歌謡集』所収の「仏足石歌」に「この御足
跡を 尋ね求めて(多豆祢毛止米弓)善き人の 坐す国には 我も
参てむ 諸々を率て」〔8番歌〕とある。

② たつのミヤ

龍宮をいふ也

【知の部】―三例

① ちいミ

血忌日也

―『合類節用集』に「血忌(チイミ)〔卷1・時候部〕、『書言字考節

用集」に「血忌日(チイミニチ)〈巻2・時候〉とある。

② ちなにたつ

万葉集に千名立と書り 種々に浮名なたつ也

—『万葉集』巻四に「吾名者毛千名之五百名爾雖立君之名立者惜社泣」(寛永本51オ。大系本731番歌)とある。

③ ちやうど

俗語也 長度と書てたけのりの義也といへり 亭々当々といふか如し

—『本朝俚諺』「長度」の条に「山崎垂加云。人の言に物ごとにかつかうありといふ。ちやうどよしといふ同意なり。かつかうハ恰好と書て。あながよしとよみ。ちやうどは。長度と書て。たけのりとよめり。〔大和小学〕これ亭々当々といふがごとく能程なり」(巻2上・13ウ)とある。↓「じだらく」。

なお『増補俚言集覽』「丁度」項は右『本朝俚諺』説に対し「山崎垂加の説を引て長度の字を充たり 箇様の語に填たる字多くハ非也(下略)」(名著刊行会)と批判的である。

【都の部】—十二例

① つくりかたむ

古事記に作「堅此国」と見えたり

—『古事記』上巻に「故、爾れより、大穴牟遲と少名毘古那と、二柱の神相並ばして、此の国を作り堅めたまひき(作「堅此国」)。(大系

本一〇九頁)とある。

② つじだま

和名鈔に蕙苡を訓せり 旋毛珠の義 実に旋毛の如き所あり 新撰字鏡に玉つじと見えたり 玉といへるハ馬援か故事を思へるにや 世記に神珠、蕙苡とも見ゆ 又ず玉の下にくハし

—『倭名鈔』「蕙苡」(右訓ヨクイ・左訓ツシタマ)に「兼名苑云蕙苡(億以二音)一名芋珠(和名豆之太万)」(寛文十一年付訓本。巻20・20オ)、享和三年本『新撰字鏡』「蕙苡子」に「玉豆志」(58ウ)とある。↓「とねりこ」。

③ つじまつり

古へ辻祭の御霊といひしハ道祖の事也 後にハ石に彫て道衢に立 今に東国にハ間見ゆ これを石地藏と混し旧像いつれと方かたし

—『塩尻拾遺』巻百に「古へ辻祭の御霊と云ひしは、道祖の事なり。今昔物語に、延喜の御時、五条の道祖神(在し)事を載す。…石に彫て道の衢に立て、(今も東国間々見ゆ)これを後には石地藏と混じて、旧像いづれとわかちがたく、大かた地藏とて、さらぬ寺院に崇むるもあり。(下略)」(『日本随筆大成』)とある。清逸本の「方かたし」は「分かたし」の誤記である。

④ つちのと

己をよめり 土の弟也 ○讃岐の海にいへるハ大づち小づち

とて嶋山二ツ北南に並ひたるあはひを通る狭門なるへしと巖
鳥詣記に見えたり

—『巖鳥詣記』(『鹿苑院殿巖鳥詣記』とも)六日の条に「御舟いでて。
うしまど。ま井のすなどにいたりぬ。……つちのとといふは。大づ
ちこづちとて嶋山ふたつ北南にならびたるあはひをとをるせとなる
べし。早しほにをし落されじと。舟子ども声をほにあげてこぎなめ
たり。ゐの時ばかりにおきの方にあたりてあし火のかけ所々に見ゆ。
これなむ讃岐国うた津なりけり。」(『群書類従本』)とある。

⑤ つまげ

裔揚の義也 詩に浅則掲すといふ 是也

⑥ つまづく

蹶をよめり 万葉集に爪突と書り 新撰字鏡に蹶をよミ蹶を
つまづきたふるとよみ又蹶然をたちつまづくとよめり

—『万葉集』卷三に「塩津山打越去者我乗有馬曾爪突家恋良霜」(寛永
本34ウ。大系本365番歌)とある。

また享和三年本『新撰字鏡』「蹶」に「豆万豆久」(73ウ)、「蹶然」
に「太知豆万豆久」(83オ)とあるが、「蹶」は清逸本「つまづきた
ふる」に対し、天治本・享和本とも「蹶 豆万豆支天太不留」(「蹶」
は「蹶」と同義。卷2・25ウ。18オ)と、「て」の字を有す。清逸本
が「て」の字を脱したか、或いは土清使用の『新撰字鏡』に斯くあつ
たか、何れかが考えられる。↓「とねりこ」。

⑦ つみにしづむ

罪過によりて沈倫する意也

⑧ つむぎ

紬をよめり 紡くの義也 綿紬糸紬延喜式に見ゆ 常陸紬ハ
庭訓に見ゆ 平織紬といふも見ゆ

—「延喜式」卷十四「縫殿寮」に「綿紬、糸紬、東繩亦同。」(15ウ。
日本古典全集本)とある。

また「庭訓往来」四月十一日状 返信に「尾張八丈 信濃布常
陸紬 上野綿 (下略)」(新大系本三四頁)とある。

⑨ つんぼ

俗に聾人をいふ 壺に耳をあて、聞か如きをいふにや 或ハ
摘頬の聞かたきをもて頬を摘て知らすともいへり ○つんぼ
を伊勢道といふハ耳の遠き義なり 外宮と内宮との間を一里
といふ 是五十町なるをもて也 ○羽州にてつんぼをきんそ
ハといふ

—「和漢三才図会」「聾」(つんぼ)の条に「俗云豆牟保」(卷10・人倫
之用)とある。

なお「和訓栞」後編「いせみち」項に「俗に程遠きたとひにいへ
り 内外宮の間五十町を一里とするに起れり (下略)」(卷2・8オ)
が見える。

⑩ つらなるえた

連枝也 兄弟をいふ ○連理の樹をいへり

―『易林本節用集』に「連子(レンシ)」「枝(兄弟也)」、『合類節用集』に「連枝(レンシ)」「又子同 兄弟云」(人物部・三)とある。

⑪ つるべ

吊桶をいへり 神代紀に鏡又瓶を訓せり 和名鈔に罐をよめり 釣盆の義也 吊もつる義也 ○つるべるといふ辞も吊桶より出たるにや 鉄炮などにいへり

―『日本書紀』卷二「神代下」(海宮遊行)に「一云豊玉姫之侍者以玉瓶汲水」(寛文九年本27才。大系本一七〇頁)とあり、『倭名鈔』「罐」(ツルへ)に「唐韻云罐(音貫 楊氏漢語抄云都流閉)汲水器也」(寛文十一年本。卷16・12才)とある。

また『東雅』「罐」(ツルべ)の条にも「倭名鈔瓦器類に唐韻を引て罐は汲水器也 楊氏漢語抄にツルべといふと注したり 日本紀には瓶の字読てツルべといひ後俗また釣瓶の字を用ひて読てツルべといふ也」(卷11・器用11)とある。

⑫ つるべもち

内々行事に女中言葉につるべもちといふハ餅を高さ七寸八寸四方五六寸四角にし上広く下細き箱 つるべの姿也と見えたり

【低の部】―七例

① ていす

楞嚴經に譬如有客寄宿旅亭 暫止便去終不常住 而掌亭人都无所去名曰亭主と見えたり

―『楞嚴經』卷二に「仏告阿難…譬如有客寄宿旅亭。暫止便去終不常住。而掌亭人都無所去名為亭主。」(大正新脩大藏經)第十九卷とあるが、『塩尻』卷二にも「○亭主 楞嚴經曰、譬如有客寄宿旅亭、暫止便去。終不常住、而掌亭人都無所去、名為亭主云々。」とある。

「楞嚴經に(見えたり)とあるが、『塩尻』からの孫引きと考えた方がよからう。

② ていだらく

為躰と書り らく反る也

―例えば『黒本本節用集』・『易林本節用集』に「為躰(タラクテイ)、『書言字考節用集』に「為體(タラクテイ)」(言辭・九上)とある。

③ でごう

出郷成べし 或ハ出戸と書り

④ てづま

手端の術の意 てづま人形などいへり

⑤ てづし

傀儡をいへり 手づましの略也 てくつともいふが如し

出羽にててんづしといへり

⑥ てんじん

輟耕録に今以_二早飯前及飯後午前午後脯前小食_一為_二点心_一と見えたり 舜水談綺に茶の子の類也といへり ○琵琶三弦にいふハ轉軫と書り ○北野天神あり 五條天神ハ神をすみて唱ふ 高野大師の艸創といへり

―『輟耕録』卷十七「点心」の条に「今以_二早飯前及飯後午前午後脯前小食_一為_二点心_一」(承応元年本・8オ)とあるが、『本朝俚諺』「点心」(チャノコ)の条に「……輟耕録云。今以_二早飯前及飯後午前午後脯前小食_一為_二点心_一。〔割注省略〕舜水談綺云。点心日本ニ云茶ノ子ノ類ナリ。(下略)」(卷2上・15ウ)とある。引用書例からみて本項直接の典拠は『本朝俚諺』と考えられる。

⑦ てんこちない

東国の俗語也 无骨なる意にいへり 袁宏名臣賛に天骨疎朗と見えたり ○東鑑に令藤九郎盛長行天骨地府祭と見ゆ 陰陽家の祭儀に盛長塚ハ日光山にあり

―「袁宏名臣賛」は『文選』所収の賛の一つ。卷四七に「袁彦伯三国名臣序賛一首」(袁宏。彦伯は字)と題して「天骨疎朗、牆宇高疑」とあるが、『本朝俚諺』「骨高」(ホネタカ)の条に「東国にて無骨なるものを。てんこちないといへるハ。天骨なきの謂なり。」(卷1・48オ)、「天骨」の条に「袁宏名臣賛云。天骨疎朗。牆宇高疑〔無骨なるものを。江府にてハ。てんこちないといふハ。天骨なしといへるこゝろなり〕」(卷6・5ウ)とある。題名・注文内容からみて

本項が『本朝俚諺』に拠っていることは明らかである。なお本項は土清白筆本にも

東国の俗語也 无骨なる意にいへり 袁宏名臣賛に天骨疎朗と見えたり

と認められるが、増補部分の『東鑑』に関しては「天骨」の例は見られず、また「天骨地府祭」では文脈を満足しない。恐らく字形類似による「天曹地府祭」(寛永本は「天曹地府祭」に作る)の錯誤と思われるが、これとても「藤九郎盛長」に続く例は見出せない。

【登の部】 ― 十三例

① とぎ

伴語の人をいふ 今伽の字を用るハ人加二合の義を借也 とぎばふこなともいへり

② とざま

外様と書り 足利家十一位にも御一族大名守護外様とならへり

③ どなた

俗語也 誰方といふか如し どのかた也 のか反な也

④ とねりこ

倭名鈔に石檀をよミ新撰字鏡に秦皮を訓せり 秦皮ハ皮をいへり 速練木の義にや 西土北京の墨ハ秦皮汁にてかためたる也といへり 近製南都の製にも秦皮墨あり 樹の性もねば

しよて槍の柄とすといへり 賀州にてだごの木といひ伊勢にてだんのきともいふめり 檀の音也 大葉あり 小葉あり ○舎人をとねりこと歌にもよめり

―『倭名鈔』「石檀」(右訓トネリコノキ・左訓タムノキ)に「蘇敬本草注云秦皮一名石檀(和名止祢利古乃木 一云太無乃木)葉似檀故以名之」(寛文十一年付訓本。巻20・28ウ)、享和三年本『新撰字鏡』「秦皮」に「止祢利古木」(51ウ)とある。

なお『新撰字鏡』は天治本と享和三年本の二種が存するが、前者に右の訓はなく、また享和三年本にしても土清没後の刊行である(土清は安永五年没。本項と同様の例は後掲「のむじ」項他にも認められる)。土清使用の『新撰字鏡』が如何なるものであったかが興味惹かれるが、ともかく今は享和三年本を使用することにする。

また『用葉須知後編』「京墨」の条に「墨二種アリ 漢土北京ノ者ハ秦皮汁ヲ以テカタメタルモノ也 是ヲ用ヘシ 南京ノ者ハ牛膠ヲ以テカタム 葉ニ入ヘカラス 正字通ニ黍ヲ烟ニ焼キ松媒ニ和シテ為ト」(巻2・14ウ)とあり、『廣大和本草』「秦皮」の条にも「和名ニガキ 一名トネリコ 江州ニテハサギト云 俗ニダゴノ木ト云モノナリ…蓋中土ニテ秦皮汁ヲ以テ墨ヲ製ス故ニ眼目ヲ傷タルモノ華墨ヲ眼中ニ点ズ 墨本眼目ノ薬ト云ニハアラズ 唯秦皮汁ヲ用ルノ意ナリ 仮令華墨ニテモ松烟墨或ハ膠ネリノ墨ナルトキハ果シテ験ナシ 況ヤ直ニ秦皮汁ヲ点スレバナヲ以テ宜ロシ 誠ニ神仙ノ奇

薬ト云ベシ…近世倭製ニモ秦皮墨アリ 南都墨工古梅園ガ製スル処ナリ」(巻6・10ウ・11ウ)とある。『廣大和本草』に従うならば清逸本の「近製南都」は「近世南都」の誤記ということになる。

なおまた『大和本草』「秦皮」(トネリコ)の条に「葉ハ椿ニ似テ葉サキトカレリ…樹直ニシテ性ネハシ 用テ槍ノ柄トス 樹皮紫黒色ナリ」(巻11・2オウ)、『用葉須知後編』「秦皮」の条に「トネリコノ皮也 一名椿皮 北国ニテダゴノ木ト云フ 此物細葉桃葉ノ二種アリ 桃葉ノモノハ葉大色深緑ナリ(下略)」(巻2・1ウ)とある。

また「舎人をとねりこと歌にもよめ」る例としては、例えば『夫和歌抄』の「とねりこか袖も露けしとも岡のしけきさ、ふの行くささるさに」(国書刊行会本。巻21・岡)が挙げられる。

⑤ とねりがひ

鷹にいへり 宿養と書り

⑥ とびバす

蓮実の飛をいふ 俗に放逸の人をとつびやすといひ蓮の実のやうなといふ也

⑦ とひかける

人長のもちたる輪をいふ 或ハ釣招とも申すと体源抄に見えたり

⑧ とまりがり

泊狩の義 鳥の声を早朝に聞べきため也といへり

⑨ ともなふ

伴をよめり ともなすの義也 三代実録に共なひと見えたり

玉葉集に

秋の夜を独や鳴てあかすらん友なふ虫の声なかりせは

秋声賦に但聞四壁虫声唧々如助予之嘆息と見えたり

―「玉葉集」卷四「秋歌上」に「虫をよめる 西行法師」として「秋

のよをひとりやなきてあかさましともなふ虫のこゑなかりせば」(新

編第1巻616番歌)とある。第三句は諸本「あかさまし」とある。

清逸本の「あかすらん」は何に拠つたのであるうか、明らかでない。

また「秋声賦」(歐陽脩。『古文真宝後集』所収)の用例は右「玉

葉集」の歌意を知らせんがために引いたのであるうか。見出し「と

もなふ」とは直結しない。

⑩ ともゑいし

美濃赤坂金生山より産す 青石に巴の文あり ○西土に巴石

といふは礬石の種也

⑪ とゆ

雨おほひの具をいふ 紙布の類に桐油をひきて用うるゆゑに

名とする也 桐油ハあぶらぎりの油也

―「用葉須知後編」「桐油」の条に「罌子桐ノ油也 近江ニテ多ク灯ニ

燃ス 俗ニ傘ナトニ引ク油ヲ桐油ト云フハ誤也 傘等ニ引クハ荏油

也 又エゴマノアブラトモ云フ」(卷2・11ウ)とある。本項の削除

はこれに依るか。

⑫ とよほぎ

豊祈の義也

⑬ どれ

物まうと呼バどれと答ふるハ誰の転語也といへり 俗にどれ

ほどなどいふハいづれほどの義也 ○俗にどれやといふ事を

発する語也 源氏などにいづらといへる如し

―「源氏物語」花宴巻に「頭中将、何づら、遅し」と有れば、『柳花

苑』と云舞を、是れは今少し打過ぐして、(下略) (元和古活字本。

日本古典全集一・一六四頁)とある。